小田原史談

第32号
発行所　小田原史談会
小田原市幸一丁目
郷土文化館内

印刷の御用は
清水印刷
小田原市幸一ノ一七
電話小田原三四七七番

九華和尚について

中野敬次郎

九華和尚は鹿児島県大隅国の人、天文十九年に足利校の司業となり、のち同校第七世都講（校長のこと）になり、天正六年七十九才をもって同校に歿す。足利学校にあること三十年間、同校において教育した子弟三千人に及ぶ。戦国時代第一級の碩学である。

九華は、足利学校で多年教授に任じ、百日の周易講義のみにても十六回、十一年間に及んだので、六十一才の時老後を郷里に隠棲しようとして、帰路小田原に立寄り、北条氏康・氏政父子に挨拶のため面会したところ、氏康父子はこの大儒者の来城をよろこんで、小田原に留めて三略の講義をなさしめて氏康父子が受講したよって、由緒深き同校が衰微することを憂い、切に今一度足利の地に帰り止まらんことを請うたのである。

九華は、北条氏康父子が教学に熱心で、老儒を遇する礼の篤きに感激し、郷里に帰ることを断念し、身を終るまで、足利学校の講延と運営に任じた。北条氏の教学の盛んであったことを示す美談である。

そして、その講義が終了したので謝礼として宋版文選を贈った。

そして、このような大学者が、足利学校を去ることに

九華に贈った宋版文選は現在足利学校に残っており、金沢文庫本文選として知られている。その中の各巻に奥書があって

学校寄進
永録三庚申六月七日
平氏政朝臣

とある。また第三十九巻の末尾に

隅之産九華六十一才周易講一百日之会十有六度伝授之徒以上百人也欲赴其郷梓之時抑留之次有寄進也

と九華自らの跋文があるので有名である。

久野にある敷石住居

市内久野日蔭部落磯崎憲次氏（史談会員）所有の地所内に弥生式時代？の住居の跡と見られる敷石の上に鎌倉―室町時代の墳墓の跡があって、所謂二重遺蹟として市文化財に指定されている史蹟がある。上図はその史蹟を四月二十九日史談会主催史蹟巡りの際に撮影したものである。

名胡桃城のこと

四月二十九日の史談会主催の史蹟巡りに参加し先人の跡を訪ね、私をして遠く数百年の彼方に運んでくれたことは、最近にない興味深く有意義な一日であった殊に立木さんの情熱あふれるご説明には全く敬服せずにはいられなかった。その折ふと私が沼田（群馬県）に居た時に巡った史蹟「名胡桃城」のことを同行の清水さんに途々話したところそれは面白いから是非「史談」に投稿したらということなので、私としては今回の催しに対するお礼もかねて敢えて駄文をものしたような訳であります。

×　×

さて、名胡桃（なぐるみ）城は小田原の人達で少しでも史蹟に興味をもっておられる方なら、忘れることの出来ない城なのである筈だが、案外に知られていないのが不思議である。それというのは、この城が秀吉の小田原攻略の直接の原因となり、いわば氏政氏滅亡の動因となったからである……考がえてみれば当時の小田原の余りにも華やかな文化に、このような滅亡の

歴史の一駒などは押し流され、いわば〃古痕に触れられる思い〃がするためかも知れない。このことは先日の史蹟巡りでの大森氏の文化と何か似たものがあるようだ。勿論かくいう私もこの名胡桃城のある沼田に二年ばかり在勤しなかったら知る由もなかったのである。

私がこの城を最初に訪れたときは「利根沼田を愛する会」（後述参照）の会員の人達と五年前の初夏のある一日だった。城跡は町の人達によってきれいに手入れされており、今に残るものとては神社と濠のみである。この小さな城が、当時は関八州を征覇した北条七万の大軍を迎え撃って敗れた往時を想い、哀愁迫るものを禁じ得なかった。

上越線の清水トンネルの五つばかり手前に後閑という小駅がある。この駅で下車してバスで二十分揺られると、もうすぐ城の近くに着いてしまう。ハイキングコースとしてはうってつけのところだ。この辺までくると利根川も狭まり、眼下に岩をかむ清流はその源である。斯の魔の谷川岳がすぐ近くまで迫っている。城址から見る眺めは絶佳である。それと共にこの地が関東平野のつきる最北端に位し、まさに要害の城であることをまざまざと感じさせずにはおかない。

この名胡桃城は明応元年（一四九二）の頃沼田氏六代景久の三男景冬によって築かれたといわれている。戦国時代この地方は、越後の上杉、甲斐の武田、相模の北条の三氏によって屢々争奪の的となったが、この城は関東管領としての北条氏の手になく、沼田城と共に武田の代将である真田昌幸が治めていた。ここに北条氏としては軍を起こして完全に関東一円を我が掌中に治めようと狙っていたのである。

再三にわたる秀吉からの上洛の申し入れに、北条氏政は北関東の目の上のコブとも言うべきこの城を手に入れるはこの時と「沼田と名胡桃の城を渡すなら上洛する」との交換条件を示したのである。そこで秀吉は止むなく真田昌幸に「信州伊奈の一郡を替地として与えるから両城を北条に渡すように」と命じたが、昌幸は「沼田はともかくも私の墳墓の地である名胡桃城だけは渡すわけにはいきません」と答えた。これによって秀吉と氏政との話し合いの結果、名胡桃城をのぞき他の諸城は北条氏に帰することで、北条は納得した。

ところが沼田城を手に入れた氏政は、その旗下の将猪股能登守範直を城代としたが、この城代は音に聞こえた関東の荒法師、武蔵七党の一人であって、天下の関白大政大臣秀吉を恐れず「猿面何するものぞ」と謀を用いて名胡桃城を攻略してしまった。秀吉はこの北条の不信を怒り（というよりもいい口実に）天正十七年十一月（一五八九）十七万の大軍を以って小田原城攻略を行なったのである。

かくして北条は遂に天正十八年七月（一五九〇）を一期として五代氏直を以って滅亡したのである。

×　×

相互銀行小田原支店長
土田　正男　氏　寄稿

春の史跡めぐり

前日は空模様があやしく天気も危ぶまれたが幸いにも本日は一変した良い天候に恵まれた。午前九時三十分に小田急足柄駅前に集合ここにて出席をとり、参加者に参考資料を渡す。井上副会長並に久野古墳めぐりの講師立木望隆先生の簡単なあいさつがあり一路久野諏訪の原の総世寺をめざし途中の古墳めぐりに向う。

なおこの日の参加者は百十六名で講師並びに事務局員等を入れると約百二十名である。市内はもとより東京・静岡県などよりも参加者があった。特に今回の史跡めぐりは会員のみならず一般市民並びに年少者も多数参加したことはうれしい。

道は小高い丘を通っているので講師の説明を聞きながら眼下に広がる景色を眺めるのは又格別である。

立木講師のユーモアを混じえた説明に一同あきることなく久野古墳群を見学し正午に総世寺に到着する。ここにて参加者全員ハイキング気分よろしく天然じゅたんである芝生の上に車座になって昼食をとる。

昼食後十年に一度しか公開しないといわれる総世寺の宝物を住持のご厚意によって見学することができた午後一時より副会長中野敬次郎先生のこの総世寺に関係の深い大森氏についての講演が開始された。会場は総世寺内の一室を使用したのではあるが附近の人も集まって二百名。身動きも自由にできないほどの盛況さであった。

午後三時予定通り本日の行程は全部終了し全員無事に帰途に着く。

四月二十九日

（事務局　松野光純記）

鉄道記念物（四）

額田喜代春

〃旧長浜駅舎〃

明治五年、日本で最初の鉄道が新橋―横浜間を、聞きなれない汽笛で、ピーポーと鳴りひびかせながら、あかあかと火の燃えた岡蒸気を、走らせ初めてから今年は丁度、九十二年目を迎えたのであるが、この長い歳月の間には、国鉄の建物も数十万を数へたであろうがこの建物の中でも国宝的存在として、国鉄が保存しているものに、旧長浜駅舎がある。この日本で最も古い駅は現在も北陸本線長浜駅構内の南競、琵琶湖のほとりに前号に述べた〃分岐器ポイント〃と共に鉄道記念物が二つもあるという珍らしい話である。

同駅は地元有志の熱心な願望のもとに、明治十三年（一八八〇年）に着工して、同十五年三月十日に完成、同駅開業と同時に長浜を起点として柳ケ瀬トンネル入口まで、大寺、河毛、高月木の本、中ノ郷、柳ケ瀬と七駅が開業した。

長浜駅は当時としてはモダンな二階建英国式れんが造り建築で、尾根、窓わく、それに角型の煙突二本は明るい赤色で四隅下層を御影石で積み重ねた、ハイカラな建物であった。只今では日本国中どこにもこんな古い洋風建物は残っていないから、鉄道の駅建築の歴史的記念物というばかりでなく、明治初年の洋風建築としても珍しい存在でしょうね。

この時の初代駅長は後の東京駅初代駅長となり、東京の名士として名を残した高橋善一氏であった。高橋氏

は明治六年新橋駅の油さしとして入ったというが、後に大阪に転じて車掌となって活躍している時、〃鉄道の父〃とよばれていた鉄道局長井上勝（明治五年鉄道開通当時の鉄道の頭で以来二〇年の長きにわたって鉄道を支配した）の目にとまって、引きたてられ、目に一丁字ない身でありながら一車掌から一躍駅長となり後には新橋駅長に抜てきされ、永く同駅長をつとめその後、大正三年十二月七ケ年の月日を費して完成した東京駅（それまでは中央停車場といった）の初代駅長となり、当時は大阪、京都と共に日本の三大駅長とよばれ、海外にまでその名を知られた大人物である。

この高橋について或る文献によれば、

長浜の駅長になった時は、柳ケ瀬までの七つの駅長を全部兼務させられた。

長浜、柳ケ瀬間には客車八両しかなく、駅長は列軍に乗って、木の白い札と、赤い札を持っていて、バスの車掌のように、車内でこの木の札を売っていた。長浜・柳ケ瀬間は、お客の出す金が、天保銭あり、文久銭あり、一厘銭ありで、その銭勘定がいそがしくて、容易でなく、夜眠るひまがない仕末で遂に悲鳴をあげてめんどうをみてくれていた鉄道頭井上勝に訴えると、井上勝は〃銭は勘定しなくてもよい、箱に放りこんでおけ、しかし毎日の売りあげはいくらあったと、大体を日報につければよろしいその代り日報はきちんとつけろよ〃と注意した。

乗客の数も相当あって、八両では運びきれないので、工事中の柳ケ瀬トンネルへ材料の木材や砂利を運ぶ貨車の貨物の上にゴザを敷いて、客を運ぶのが毎日のことであった。只今では想像できないことが当時は平気で行なわたていたのであった。

鉄道も昔は木札を切符にしたこともあり、メタルを代用したこともあったというが、このメタルの乗車券はたった一枚だけ、それとみられるものが国鉄にいまでも保存されているそうである。

旧長浜駅舎は現在では二階を空室とし、階下は鉄道購売部の倉庫として、職員のために老軀をささげている

（次号には北海道開拓のために活躍した〃弁慶号〃機関車を掲載の予定）

天王講に参加して

井上　英一

今年ももう直ぐ天王講の時期とはなった。思い出すのは昨年のことである。日誌を繰って左に記して見よう。

われわれ栢山の農村地帯では毎年豊作を祈る意味において田植も無事に済んだ七月の初めに、村中一同に会して年中行事の打合せをするのである。今年も七月六日午前九時に山王さんに中村宮司を迎えて厳かに五穀豊作と村民安泰のお祈禱をしていただいた。

出席の方々は自治会長の古屋儀佐雄氏、副会長の奥津督治氏それに会計の石井安次氏外村の役員数名である。私も末席をけがして悪除けのお払いをして頂いた。それにこの頃の気まぐれに天気も今日は朝からどうやら保って雨も降らずまあまあというところである。

約一時間にして式も終り直ちに吉崎徳蔵氏宅に行きぞくぞく集まる村人達と共に昼食を取った。

会場の床間には「祇園牛頭天王購」の掛軸が掲げられている。誰やらその意味を問う。説明していわく

祭主を牛頭（ゴツ）天王と言います。牛頭天王とは祇園精舎の守護神でありまして、古天竺摩竭陀国の須達長者が釈迦如来の為めに建てた寺です。即ち牛頭天王とはお釈迦さんのこと、それから水田法はお釈迦さんのご指導に依って創められたものでありましてお袈裟の由来に関係がある。お袈裟を福田衣とも水田衣ともいうのです。かような由来によって農民は年一度の春の農繁期の田植も漸く片づいた万具洗（まんがあらい）の頃即七月五日より十五日までの十日間に釈迦をお祭りして講中が一同に会してその年の農作を祈るのであります。と私は説明するのでした。

文苑

○　杉山　康輔

貧しさの中にわれあり吾ありて子らは育ちぬ夢あまたもち
ひとときは不遇の地位におかれたる会社の窓の灯なつかしみ仰ぐ
雨戸ひきて刺さりしとげのうづくあした今日の一と日をやすかれと祈る
いさかひてこもりし妻の室ぬちに虚心に折りし鶴残しあり
孤独とも貧とも言はぬ貸間して老婆は棲めり猫あまた飼ひ

○　浅井久美子

五月晴の今日一人居の昼餉にて一尾の鰺焼直し居り

○史談会春季史跡巡り

四月二十九日

清水専吉郎

諏訪の原花建松の道のべに昔語りをまのあたり見つ
春風にいざなはれつゝ久野古噴ねむり覚ますか人の訪ひ来て
浄水池芝広原に久野穴部酒匂狩川見はらしに佇つ
大森氏の昔をいまに総世寺そのまゝ伝ふ宝物のかずいまは昔すぎし年月まのあたりわれふみしめて諏訪の原ゆく

かぶりもの展

清水専吉郎

かむりもの移り変りをまのあたりねむり覚ましつこゝに展くる

編集後記

▲前号にて九華和尚についておたずねしたところ、早速当史談会副会長中野敬次郎氏からご教示を受けました。（巻頭に掲載）ここに感謝の意を表します。なお九華和尚について私の友人である郷里史家、平原勝郎氏の言によると、和尚は姓を伊集院といい、薩摩出身では印元・石屋禅師・覚卍和尚等とともに天下高名の碩学として知られているとのことでした。序に足利学校は平安時代に小野篁が創設したという説がありますが、足利時代には上杉憲実が永享四年に復興して、漢学の中心地とし、全国より優秀な人物が集まったと伝わっています。恰度今日の帝大のような最高学府であったと思われます。

▼五月十七日より三十一日まで郷土文化館において開催された江戸・明治かぶりもの展には婦人の被衣綿帽子・義士討入頭巾・陣笠・鳥帽子・あじろ笠等時代の変遷を知る貴重な物かありまして明治時代に到っても我々の知る幾多の帽子の変遷が展開されて往時を偲ぶものが

少なからず、よくこれだけの物を集めたと当局の労を多とするものありますが、ただ私の気付いたことは割合に軍帽の少なかったことです。殊に陸軍の将官や下士卒の礼帽や制帽が見当らなかったことは、軍備が廃止された今日、一般国民が軍服に関心を持たなくなった証拠として見るべきで、敗戦の痛手が、軍服にも及ぼして、名誉であるべき軍帽を保存するものがなくなったのを思えば一抹の淋しさを禁じ得ないものがあります。

▼私は五月限り編集事務をご免蒙る旨を発表しましたが、種々の事情から当分なお編集を担当することになりました。どうぞよろしくご支援のほどを。（蓑田）

会告

本会々報も各位のご支援によって三十二号に達しました。この際一層内容の充実を期し、特に未聞の歴史上の事実や郷土民芸俗謡等歓迎しています。会員各位奮ってご投稿下さい。

小田原史談会編集部

小田原駅前
職業安定所前向い
喜仙寿し
江戸風味天婦ら
TEL 3747

小田原信用金庫
小田原市幸1の179（電話(0465)(22)3121）
理事長　鈴木十郎
十字町支店（電話(22)5121代）
緑町支店（電話(22)5124代）
湯本町支店（電話箱根(5)5518—9）
国府津支店（電話(47)2191—2）
鴨宮支店（電話(47)2138代）

セトモノの御用は
（陶磁器・陶管・植木鉢）
有限会社 大川商店
TEL8513・3055

建築金物
家庭金物
株式会社 星崎仲吉商店
小田原市多古412番地
電話 2718

電気工事一式・設計・請負
販売修理
兵藤電気商会
小田原市下曽我駅前
電話国府津(47)3578番

御料理
御弁当 仕出し
株式会社 東華軒
代表取締役　飯沼相三郎
小田原駅前
TEL (0465) 5061～2

楽しい生活
明るい読書
八小堂
小田原駅前 TEL5388～9

魚
志澤
TEL3131